

inachevé étoile

鹿児島県立大島高等学校 二年 正田 愛恵

「ここに住む僕らは君と違って人間じゃない。どこから迷い込んだか知らないけど、早く帰ったほうがいい。」
開かれた扉から現れた少女に僕は言った。しかし彼女は人ではなく、ボロボロな姿の人形だった。

「人間だったら幸せだったかな。どんなに人に似せて造られても少し壊れただけでもういらんだった。」
と呟いた声は、今にも消えそうなほどだった。僕は仕方なく戸棚から布や油さしなどをとり出し、汚れなどを落とし、関節に油をさした。

この湖に面した島には人間界を創造する職人たちと希に人間界から流れ着いたモノたちが暮らしている。こんな離れ小島にいるより町に行けば何か分かるかもしれないと思い、少女に町に行くことを勧めた。しかし見送るため外へ出たとき、運悪く町に住む職人の二人組に出くわしてしまった。またいつものようにヒソヒソ話が聞こえてきた。

「あの子のお爺さんが生きていた頃の星空はきれいだったのにな。」

「あの若さで、才能もないのに後継ぎになるなんて気の

毒にね。」

僕はいつも悔しかった。だから他人と関わらないために一人で小島に住んでいた。早くまた一人になりたいかった。少女に早く行くよう、せかそうとしたときだった。
「やっぱり今日は行かない。」

と少女は苛立ちながら来た道をひきかえした。困ったことになった。説得できそうにない。

さらに運の悪いことは続くもので、外に出しっぱなしにしておいた大切な道具が湖の中に落ちてしまっていた。でも、僕は拾おうとはしなかった。いつまでも上達しないのならいっそのまま捨ててしまおうと思った。
ザブツザブツ。少女は黙って湖の中に入り道具を拾い上げ始めた。

「もういいんだよ。ほつといて。」

しかし彼女は拾うのを止めようとはしなかった。ぽつりと彼女は言った。

「やめちゃだめだ。大事なんでしょ。」

僕は、はつとした。そして、僕も一緒に湖に入り、残り一つになった筆を手探りで探し始めた。なぜだか僕の口からお爺ちゃんとの思い出がこぼれ落ちてきた。

「僕の一族は夜空に星を描く職人で、中でもお爺ちゃんは天才と言われていたんだ。お爺ちゃんの描く星空は、みんなを幸せな気持ちに変える力を持っていた。」

「僕の両親は早くに亡くなって、お爺ちゃんが世話をしてくれた。僕はいつもくっついて一緒に遊んだり、お爺ちゃんの仕事の手伝いをしたりしていた。」

「お爺ちゃんが亡くなり、僕が星を描く筆を受け継ぎ、星描きの仕事を継承することになったんだ。」

日が暮れだし、あたりが薄暗くなってきた。

「だけど、僕は全然上手く描けなかった。始めは、最初だからそんなに上手くいくはずがない、これから上達するはずだと思っていたけど、どんなに描いても星の輝きは弱く、くすんだままだった。」

「しばらくたつと、他の職人たちがからかうようになった。それはとても悔しかったけど、自分の力じゃお爺ちゃんやんの星空にはとうてい及ばないことが分かっていたから、何も言い返すことができなかった。」

僕は心の中に抱えていた不安を全部はき出していた。 「私ね、瞳が片方無くなってしまったんだ。それで、今まで私を大切にしてくれていた人間の女の子に『怖い』って言われて、とうとう捨てられちゃった。」

「とてもつらかった。だけど、ここに來ることができてよかった。」

少女はほほ笑み、話を続けた。

「まだ私とその女の子のところにいたとき、夜になるといつも窓際に置かれていたの。そこから、いつも星空が

見えていて、星空を見るたびに、やさしくてあたたかい、幸せな気持ちになれたんだよ。」

「あなたが描いてくれていたんだよね。ありがとう。」

僕の不安は、霧が晴れるように無くなっていた。ふと湖を見ると、竿から流れ出た星屑たちで星空のようになっていた。それは、お爺さんの描く星空、いや、それ以上にからりと輝いていた。

「あつたよ。」

少女が筆を見つけて手渡してくれた。

「ねえ、私もここに一緒にいていいかな。」

僕は筆を受け取って、久しぶりに笑顔になれた。

「もちろん。」